シリーズ

季（とき）のことば「春」

「ことば」によって
豊かな四季を楽しむ私たち日本人。
名句や名歌を訪ねながら、
日本文化の豊かさをご紹介いたします。

季のことば『春』

私たち日本人は、季に名前をつけ、
豊かな四季を楽しむ術をもっています。
季のことばの美しさを感じ、
季節のうつろいの中に
「ゆとり」をみつけてみませんか。

俳句の世界で「花」といえば桜を意味する季語です。現在は染井吉野が多いですが、かつて「花見」は、ほんのりと色づいた遠くの山桜を愛でる行事でした。桜の「さ」は神様を意味する言葉で「くら」は座する場所。神様がいらっしゃるところというのが花名の由来という説もあり、花見には稲の豊作を神に祈る意味もあったと言われています。

開花を心待ちにしている人たちが多いだけに、桜にちなんだ季語はたくさんあります。桜の咲く時期に寒が戻るのは「花冷え」、散りゆく花びらを雪に見立てた「花吹雪」、花の霊力によって飛散すると信じられていた悪霊や疫神を鎮める「花鎮め」……。「花七日」という言葉もあるほど、桜は楽しめる時期が短い花です。薄曇りでどんよりとした「花曇」のまたの呼び名は「養花天」。この言葉には、桜の花をほどよく育てるという意味とともに、少しでも長く楽しんでいたいという、昔も今も変わらない思いが込められています。

ひさかたの光のどけき春の日に
しづ心なく花の散るらむ

紀友則

春のことば

北窓開く

冷たい北風が吹き付けるために閉ざしていた北窓を、久しぶりに開けて春風を入れる。そんな春を迎えた喜びを表す言葉。

麗か［うららか］

春の光に包まれ、透明感があって明るくのどかな様子。気候だけでなく、晴れやかで明るい春の心情にも用いられる。

風光る

初春が過ぎると日差しも徐々に強くなる。吹く風もきらきらと輝いて見える春の盛りの喜びを生き生きと表現した言葉。

落し角［おとしづの］

男鹿の角は毎年４月頃に落ちて初夏に再生する。まだ皮膚で覆われている柔らかい角、「袋角」もまた春の風物詩。

茎立［くくたち］

暖かい日が続き、大根や蕪などの花茎がぐんぐん伸びていく生命力を表す言葉。ただし水分がなくなるので味は落ちる。

鳥帰る

白鳥や鶴、雁など、越冬していた鳥が、春になって北方の繁殖地に帰ること。「鳥雲に入る」という比喩的な表現もある。

蜃気楼［しんきろう］

気象条件と光の屈折によって、海上や砂漠などに見えないはずの遠くのものが見える現象。富山県魚津海岸が有名。

汐干狩り［しおひがり］

干潮時に干上がった浜辺で浅蜊や蛤を採る春の風物詩。彼岸の頃の大潮は一年で最も干満の差が大きいので好機とされる。

春の名句

草の戸も住み替はる世ぞ雛の家
松尾芭蕉【季語】雛

菫ほどな小さき人に生まれたし
夏目漱石【季語】菫

これはさて入学の子の大頭
山口誓子【季語】入学

石鹸玉木の間を過ぐるうすうすと
水原秋櫻子【季語】石鹸玉

春泥のそのごちやごちやを恋と呼ぶ
櫂未知子【季語】春泥

春の名歌

ひるもなほ星みるひとの目にも似る
さびしきつかれ早春のたび
宮澤賢治

明治屋に初めて二人で行きし日の
苺のジャムの一瓶終わる
俵　万智

※「季語」とは、連歌、俳諧、俳句において用いられる特定の季節を表す言葉。